

一般質問通告書

受領日時 令和3年 3月 1日 午前8時30分

3番 氏名 松浦 真

質問項目	質問の要旨
1 地域図書室「わーくる」の在り方は	<p>(1) 「わーくる」開館時間は11時～19時の時間帯で設定されているが、会計年度任用職員1名（11時～19時にずっと一人で運営を担う）では緊急対応や人が2名以上来た際の対応などで大変になることが想定される。これまでも委員会などで、「これまでの地域図書室は来る人が少なかったため、4月以降の利用者人数を見ながら効果的な運用を考えていきたい。」との答弁があった。</p> <p>4月～6月は開館すぐのため、一見の方が多く来ることが予想される。その際に1人のスタッフだと、質問や受付などにすぐ対応できず、せっかく作った図書室の印象が悪くなり、スクールトーク時に話をしていたようなコミュニティ・スクールのための学校教育・社会教育の融合が難しくなるどころか、第2期五城目町子ども読書活動推進計画に基づく、「人と地域に寄り添う読書推進」を目指すことも難しくなる。</p> <p>予算の関係で、4月から会計年度任用職員2名体制を配置することができないなら、有償ボランティアの配置もしくは生涯学習課の職員が出るなどして、常時2名以上の体制が必要だと考えられる。運営体制はどのようになっているか。</p> <p>それらを踏まえて、「わーくる」本格稼働前に抜本的な運営方針の改善と、4月以降のKPIの策定、年間ロードマップの提示が必要ではないか。</p> <p>(2) 地域図書室「わーくる」運営のロールモデルとなる具体的な先進地域として調査した自治体を挙げてほしい。その中でも、「わーくる」はどのような図書室（図書館）を目指すべきロールモデルとして考えているか。何年後にその状況を目指すのか。</p> <p>(3) 上記運営や先行事例の調査などが十分にされないのであれば、地域図書室の運営やイベント開催自体を早期に公募し、業務委託 or 指定管理化したほうが、かかる経費も抑えられ、町民のニーズに答えやすく望ましいと考えるが、その予定はあるか。</p>

<p>2 五城目町の小中の浮きこぼれ（※）対応は現状どのようになっているか</p>	<p>（1）学習進度に遅れを持つ子どもには、学習サポーターなどが配置され学校内でも個別最適な学びが保障されている。一方で、学習進度が学校のペースには合わずより高次元な内容を学習したい子どもも一定割合で存在する。そのような子どもたちにも適した学び方や環境づくりは、今後の個別最適化されていく学びの中でも同時に重要な側面として取り上げていくべきである。都市部では私学を選択すればよいが、秋田では私立中は1校、私立高は5校しかない。中学校のタイミングで県外に出る人もいと聞く。五城目町での浮きこぼれ児童の把握状況、現状の取り組み、今後の方向性はどうか。 ※生まれながらにして高い知能を有していたり、通塾などによって高い学力を身に付けたり、もともと学習意欲が高かったりする、極めて優秀な児童、生徒が、通常の学校の授業内容に物足りなさや疎外感を持ったり、実際に他の生徒から疎外されたりすること</p>
<p>3 五城目高校の高校魅力化推進を</p>	<p>（1）高校は県管轄であるが、五城目高校との連携は五城目町の未来にとって重要である。これまでも連携実績として馬場目川クリーンアップやきゃどっこまつりへの参画など様々ある。しかし、高校入学者は毎年減っている。令和3年の定員が107名に対し、前期選抜17名全員合格、一般選抜31人で倍率0.35倍。合わせて48名、2次募集の志望者は例年10名以下程度である。 山形県では、高校の定員の2分の1以下が2年続くと廃校になる指針がある。遊佐町地域おこし協力隊が地域の重要な高校が廃校するという危機感を持ち、町民の声を集め、県外募集も積極的に行い廃校の危機から復活しようとしている。高校が廃校になる前に動いて廃校を回避できたのは、県ではなく町で動いた自治体である（県外募集も可とする）。 五城目高校の存続も危ぶまれる可能性はある。五城目高校の魅力化は町としての課題でもある。5期目となった町長によるリーダーシップを用いて、この4年で五城目高校の入学者が増えるような高校魅力化事業に、新規の地域おこし協力隊を充てるなど、これまでになかった積極的な取り組みを行う必要があると考える。 高校入学者を増やすために、町ができる具体的な施策や検討を五城目高校校長や県の担当部署と行う必要があると思うが、町のこれまでの取り組み、今後の方向性は。</p>

4
地域おこし協力隊制
度のさらなる活用を

(1) 一昨年視察でも五城目町に来られた福島県西会津町では、地域おこし協力隊を民間企業と共同募集で行っており、年2回の賞与も含めて想定年収約290万円と条件に提示している。民間と共同募集することで募集ホームページなどのデザインも魅力的で分かりやすいものとなっている。

これまでの五城目町の地域おこし協力隊の募集は役場だけ、契約形態は業務委託契約であったが今後を考えると再整理が必要と考える。2021年度はどのようなになるのか。

(2) これまで五城目町地域おこし協力隊が取り組んできたテーマは、「地域コミュニティ活動、集落支援、高齢者見守り、関係人口など」が多かったが、今後町の産業や経済が活性化するためのニーズとして、「AI、ICT活用、DX活用、情報発信、狩猟など」のテーマで人材を集めることも重要である。

本事業は10分の10の予算のため、AIによる木材加工や森のジビエなどで有名な岡山県西栗倉村では、令和1年度の人口約1400名に対して31名の協力隊が入っている。

五城目町でもさらに地域おこし協力隊を有効活用できる分野として、「図書室運営、教育留学、DX活用、ICT・AI活用など」のテーマで各課から募集して、新しい意見が入り、ビジネスや交流を通じて町の風通しがよくなる状況を目指すべきである。

民間との共同募集、新しいテーマでの地域おこし協力隊募集、人口規模から考えると少なくとも年間5名～10名採用を目指すべき地域おこし協力隊の募集について、それぞれ町の考えは。

(3) 名前では、「地域おこし協力隊」とあるが、地域おこしはそもそも町に住む町民一人ひとりが行うもの。五城目町はこれまでも数多くの行事や活動を町民主体で行ってきた。だからこそ、協力隊が、すべての協力やお手伝いするという前提を外し、県外から来た孫のように地域に浸透していく中で、地元の人達が少しでも自分たちの地域の魅力を再発見、再認識するその媒介役となることが望ましい。そのためにも、行政職員から協力隊への業務指示が町民への協力やサポート前提となっている現状があれば、その無言のプレッシャーから町を離れてしまう人もいと聞く。

上記現状を踏まえつつ、町の中長期計画と照らし合わせた上で、これからの地域おこし協力隊と町との関係性はどのようなものであるべきか。